

常樂智進論

上卷

特67

370

014129-001-5

特67-370

常樂智進論

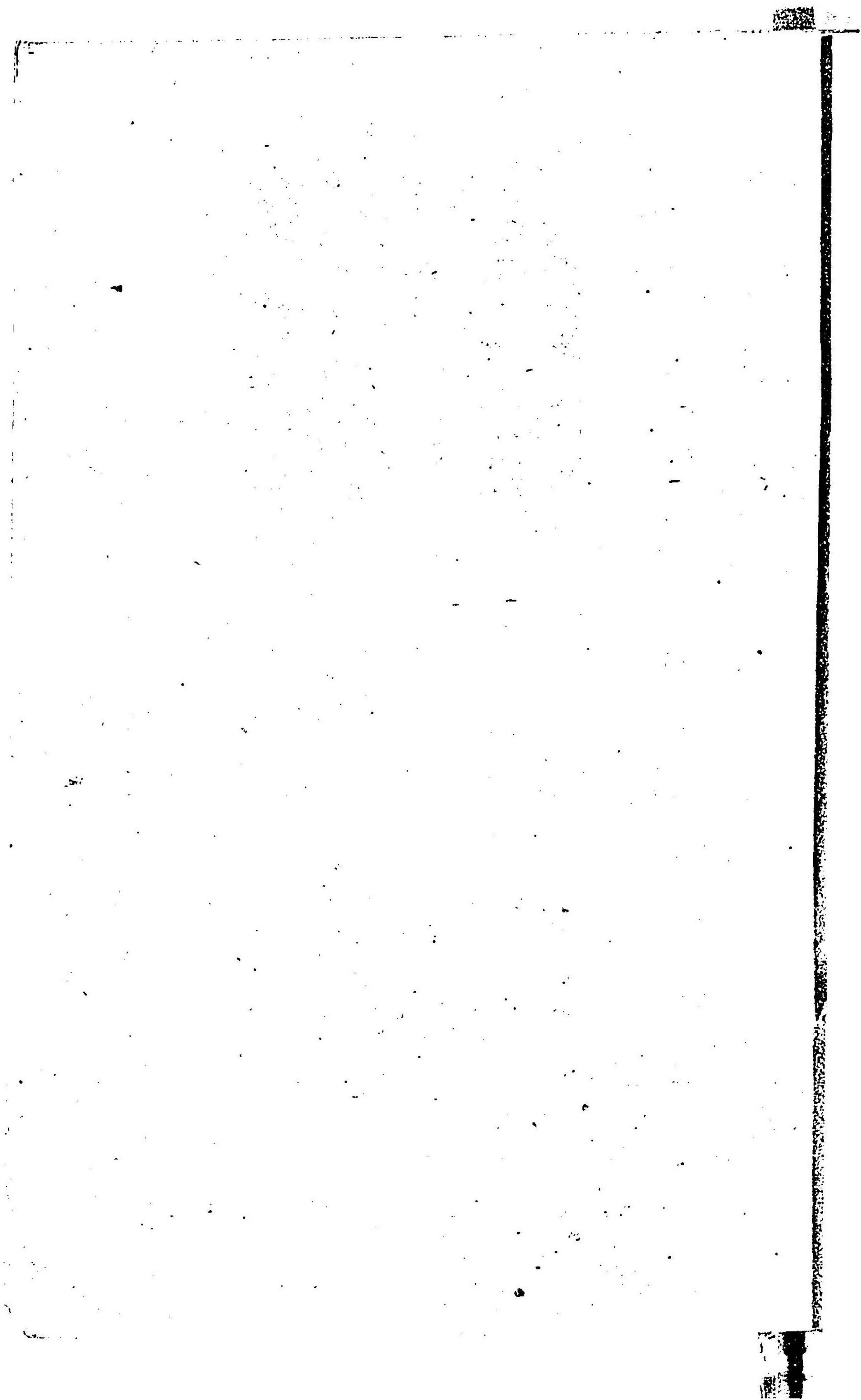
安武 勝太郎/編

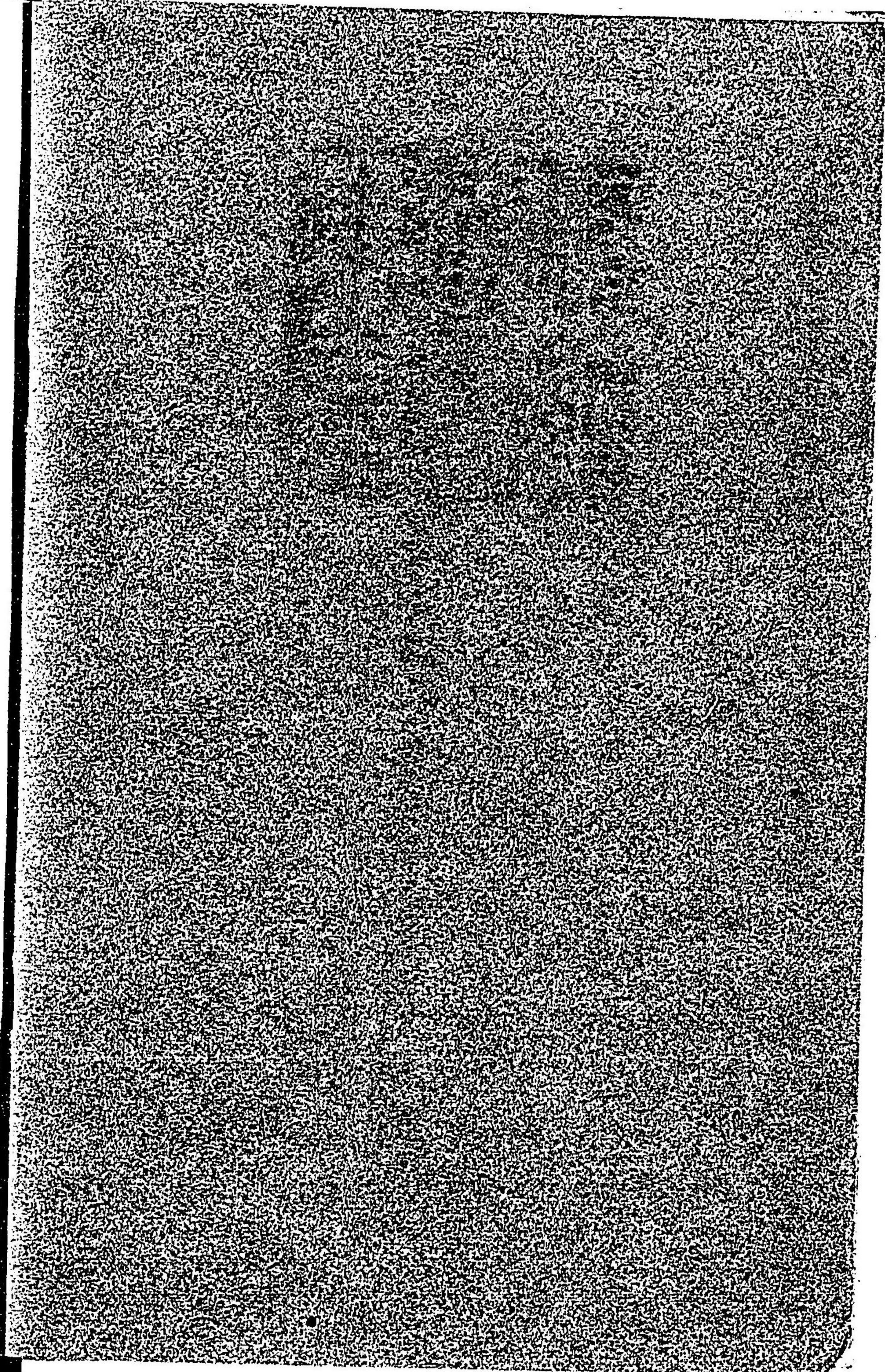
1冊(上17丁)

M27

ABB-0402

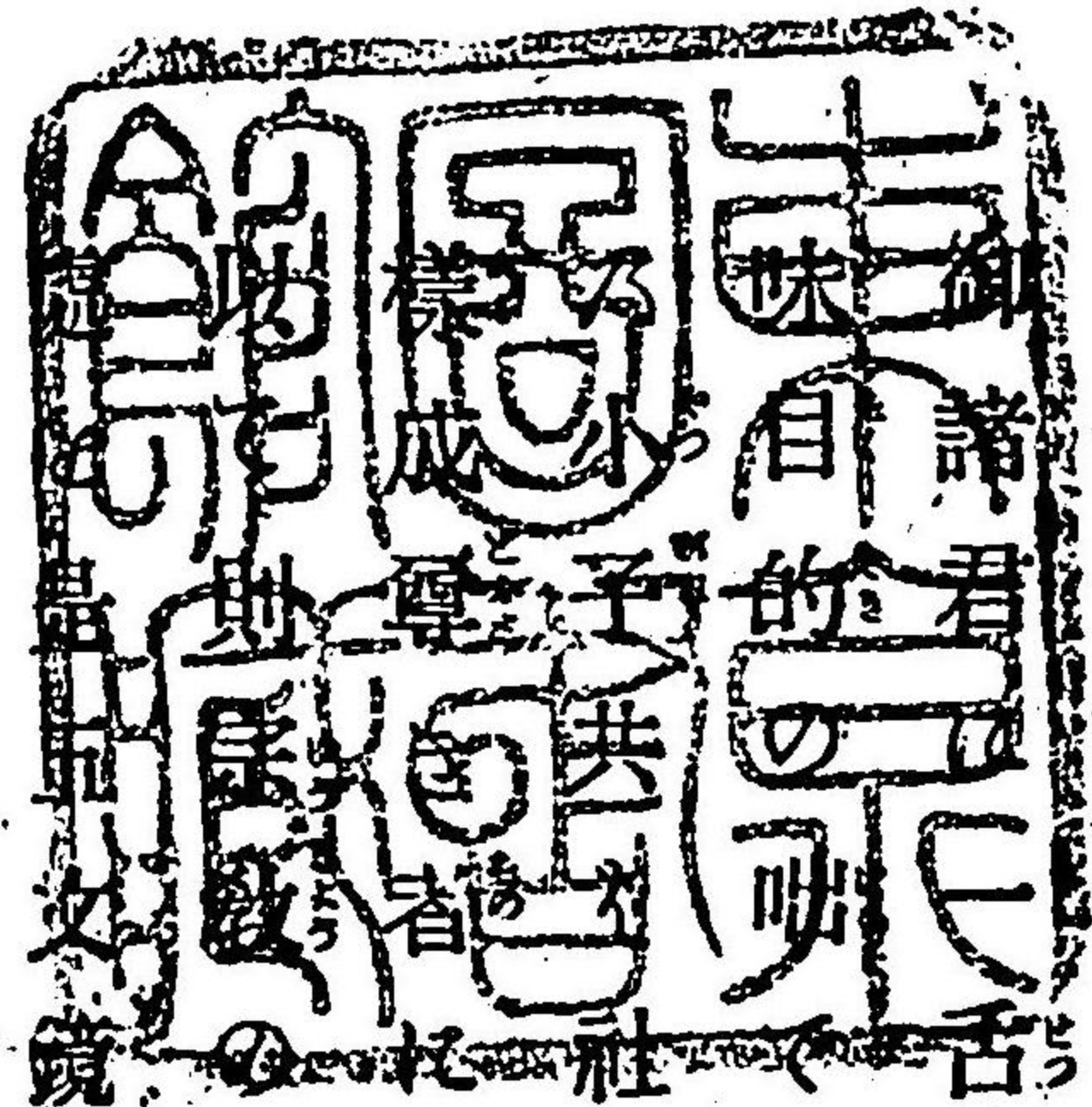






緒言

木毎にぞ豊保化今日とゆぐる代よ住よ習色の
花を咲せて



御請君の旨申上まするは則神道五文鏡の心
味目的の味有まする然も此道を開廣むる處
人出家の黨成なとゆきは中々左
はゆえなと唯平民下賤の身と
其教と直更萬の教人たる者の教
鏡の鏡よ掛て其善惡を現ふて直
は順逆わ制して一切の苦危を神と元乃此神乃
神を保道を守乃信行者と云が如き乃者て御座
りまするが是ぞ則神道五文鏡と誦處乃心乃味

こいで有ます故而て亦我日の本は神より起て
五文鏡は尊敬なす處の五開神を始として諸々
乃御神其萬物を開た玉ひて代々皇大君乃治給
處の尊き御國で御座りまするが直亦掛る文明
開化乃御代に生れ逢あるお互の身分て有ます
る故皆文學に進で夫々の智色を研て國の光を
赫さ給ば成ませんぞ然に世の中と人好無樂外
と申て人わ樂みより外よ好みは無物で御座り
まするか先人は萬物の長成か故に眞の道を損
じて眞乃樂みを見と云事と出來ません左を共
世界にわ其信の道を教の身として諸人の心を
迷わする者か有まする故其逆に迷間敷か爲に

特67
370

常樂無上智進論の説工みて進論會と云事
開て居まする其論じ方と申るは此卷に顯した
るか如くに其身に達たる處の天下晴ての樂み
なれば和歌狂歌を始として俄狂言に至迄を其
善惡の論ぜどして唯其智色の鏝の利益を起さ
ざるは之を吉と爲る而して其有益の論説を
集綴かゝて論主の名前を誌之は智進文と名付
て諸國に廣告致し直世の人に智進て互に豊
樂自由の權利を求め則五文鏡の目的で有ます
るか味は食して知る玉を故此樂みを求と思召
の御方え御加入の程單に奉願置申上ます此
書乃説意は皆

競わ假染かるそ貸にすか
論じて智恵よ進こゝろわ

常樂智進論

上卷

進論會利道誌

五文の鏡よ明治を現

馬瀧の冷水はさまを押し分て落て
玉散の身は清く天照す神の
御所の大君を治玉ひき君も
世に唯在の男に静まるぬ五開神社の恵にて民
の御前より面白やく御諸君此歌の心わびるに答
論とふまゑ

一人答て云様

其歌乃心わ世わ五文歌に治と乃意味なると存

ずきども食せずして其味分や亦鏡を見ず其面
遷事わ有まよまよは是論主左様でわ御座りません
歟
論主
其御心けんご供至極也然らば五文歌詠ます能
聞玉急

五文歌

五文心説

陽梅開御代松の身の功德なる
梅色生倫 大君わ世を 代々政治開
歌悟わ我惡志こそ源信
松學園常 天照す 祖の明照開
日本五開神社 功穀樂惡 大國をたゞ 和國飾開
陰踏行夢常是生滅夢 徳空胎惠 册誘に 人種開
歌正滅々己若滅爲樂とわさとりぬ 悟神塵心 須佐の男の神 樂風に流開

抑梅松功德悟乃五文と則萬世乃大清淨乃姿也今
日天照まろる皇御神乃能まこと人と天下乃御
靈にそ静事を司心と神の主ある我神を塵まじ此
御言法に順て梅と五行に花開松の二葉わ陰陽よ
て其樂みの色絶ぞ功わ五行也徳も亦十五行とこ
なりよける故に功德と申るわ十五の五行を悟
ぞ力えを工み直心をいとなまよ志よ一悟を以て
萬知る則十五の五行とわ

寒暑味風聲 五空よ
木火土金水とる 五胎よ
行慈直固働 五惠そなわて
青黄と赤白黒の 五色だわ

人畜魚鳥虫とけす

五生の長は人なきば

君臣父子夫婦長幼朋友

五倫和合なき

教師農工商

五學とめば則

神人と天地日月草木に金鐵

五圓の御代に住其身は

仁義禮智信

五常を保てばとほちて

是米麥粟黍稗の

五穀に命をつぎけるを

鬼愚智圓神

五心界人好無樂外な

れば風流和歌を詠じて樂み 聖人經文を造亦は深く信して

賢人其時の有様を文に 仁君子日本神いを保ちて世の 庸

人以上の信樂を庸 五樂おぞ守て日本神を行めきと

守護神と

册訪の尊徳水神冬十一月胎二十

空北胎二月惠一月徳冊訪乃清流乃身也

ば徳念ぬ心を申也

大君の尊梅花神春二月生三月倫四月

木毎に五行の満色生倫梅の花開く信の心云

天照大神松日神夏火學五月圓六月常七月

祖茂神現給時澄登火わ日輪を滄圓水わ月殘物

わ國にして是と世界天照陽明受て陰光學圓諸

木を常其常盤木乃色にともからぬ心と云べけり

大國主と功福神秋金穀月八樂月九惡月十

力らを工み功積か善と惡との離有故大國を順て

五穀も無事に樂の其福の心云

左に亦武甕槌の神天降此由主の神よ告大國答て能
 るまわく我治る中津國顯事と天津神治を可也
 我わ亦幽きて幽事治と出雲に築杵の宮と建幽玉
 以き時と其則五空の節に志て始て亦絶也是よ
 瓊々杵の御尊顯事を志る志めす時は胎節絶て亦
 則始けるが故代々皇御孫の神出て治玉いた君も
 世の尊き御國と知るぞるし
 須佐の男乃尊悟速神よ土神也天塵也地心也人
 尊わ則八頭蛇と退治此時八雲立出雲八重垣妻こ
 めよ八重垣造八重垣と荒心を和歌を詠じて樂み
 の風に流る、道開三界和國と治らる故に和心云

以上と則五神界
 そむく満慾怒逆嫉乃五惡わ
 恐厄苦迷罪五塵界にぞ落入ぬ
 故亦十二の行化にぞ

一よ行空其靈の空氣わ人の氣を得ら 二入胎其氣母の胎内に入て 三志
 惠其父母の善惡の志し 四揃色其両手 兩足頭成五働わ眼
 耳鼻舌意を五智に肝ケン腎ニ肺ヒ心セツ脾イ五藏と膽カン
 胃ヒ大腸ハイに小腸シン膀胱シン五府揃三焦の一府と外
 府故三界天地人にひす五の指と五行よて右と有
 わ陰陽也
 五よわ出生な志けきば始て五音を發てぞ遊酢甘
 辛苦五味を食志て胎を餌志る

以上乃五つわ陰五行

六に倫教二た親のおしゑにし

悪どに心へたたがうと離世の上と青せい天てん日にち天てん月げつ天てん星せい天てん雲うん天てん五

天の下と五大洲南北利加洲わ陰陽よて是に住に

志五人種と

九よ常好常に好みの起故則

十の穀苦樂人の樂み苦みの元

以上乃五つわ陽五行

左きば五心乃世界現世の事にて善と惡とを求故

十一圓樂あるわそも高天の原乃五神界五心界の内

十二角惡たる身と夜見地に落て五塵界智圓神の三つを云

以上乃二つわ陰陽よて

七學樣成長するに倫いて其

特の有樣を學ぶ

八圓角と善

是三界に離と天地人也上中下上わ陽也中下陰中

わ亦陽下陰也下中に登て中陽之中亦上よ登てと

則上陽とわなると故惡塵乃身なるとも我惡志と

源信と悟ぬ

御諸君五文歌の鏡わ此の如にして此神言を守行者わ萬の信心

に異事無萬の苦厄を求事無えて其智に進で豐樂自由の權利を

得に相違わ有ません左れ共呼わまき處有ならば問論仕玉ゑ

一人答て曰く 然らば問わん 其陰陽の歌の奇特は何程有やいかに

答て

ハイ其道利を説ます故能か聞なさいや抑陽歌陰歌と申るわ則

梅松功德悟の五つの文に十五の五行の心を以て説備たる處の

歌にして此奇特を蒙らざると云者わ有ませんぞ有とならば答

辨われ然に陽歌と申るわ

梅つばき飛とらく御代みよ松まつの身みの功徳くどくなる悟さとわ我わが惡志あくしこそ源信げんしん

此歌このうたの心こころを以もつて説とく

たを河かまてますひのくにわ

以上松學圓常也

他たと天照あまてらす日ひの國くにわ

是こゝろ冊ふ訪たづの二ふたた葉はの御神みかみより其陰陽いんやうの道みちを學圓まなて此世このよの常つね
を天照あまてらすの大神あまの現まじ玉たまいてより以もつ來きた其色いろ松葉まつはの如ごとに變へんする
事無故ことなに陰陽いんやう和合わがして梅飛つばきらく御代みよをまらちて樂たのみをなせ
よとの心こころなるべし

きみか免まいしそうめちりを

以上梅色生倫也

君きみも明治めいぢぞ憂塵うれじん尾お

則國家すなはの憂塵うれじんわ大君おほきみの尊たかの明あきに治玉ちたまいて民たみの木き毎ごとに花はなを
咲させ給たまが故ゆゑに則新年すなはの樂たのみを常つねになすの智色ちしき生なじて皆梅みなつばき

花はなに倫りん五行ごぎやうれ道みちを守まもとの心也

えるゑほるへんつねをかれ

以上功穀樂惡也

原惠はらゑ亡常むじやう世よかき

皆現世いまのよにては穀この一つひとつ又また樂たのみを見み共とも其功徳くどくの
功こうを積つば則高天すなはが原はらも生なじて其憂塵うれじんを亡なして是樂こゝろみの常つねの
世よに住す也

おにれさせせめことふけや

以上徳空胎惠也

故ゆゑと寒ふゆ爲なめ壽しゆ哉や

衆生しゆじやう空くうより胎たに現まじて世よの憂うれを見み共とも神佛しんぶつの惠めぐみに把時すまわ其
故ゆゑに現世いまのよの苦厄くやくわ寒ふゆせぬに壽命しゆめいを保たもて則來世すなはを樂たのわ是悟こゝろ
の一徳ひととく也亦天またあまの五神界ごしんがいに登のぼり地ちの五塵界ごじんがいに落お入りも是人このよの
五心界ごしんがいの悟さとに有故あに我わが惡志あくしわ則信すなはの源みなもとなれば之これを無上むじやうの

悟とわ云

亦曰く

以上のかな文字の七字目くに當字を綴て見れば

すみゐかなせや

住居誦爲哉

此意わ現世の苦厄を神の道を守て其樂みの住居を爲の誦をせよとの心なるべし

亦陰歌と申るわ

諸行夢常是生滅夢正滅々已若滅爲樂とわ倫ぬ

此故に

いろはにやへとちりぬるを

色わ香と散ぬる尾

以上梅色生倫也

人わ現世に其色生じて其善惡に倫が故に是梅の五行を守と守らざるとの離有と雖諸々の行わ常の夢にして死に離の無きわ則花咲て皆散か如し
とかわたれそつ糸からむ

以上松學圓常也

我除誰そ常那羅無

則人わ一代の内に其善惡の學を常に圓而して是現世に生するも夢亦滅するも夢にして生死の陰陽有が故に亦善惡の陰陽も有故に來世に至ても其苦と樂の陰陽の夢有わ松の二葉の如也

今ののれくなまけふこねて

以上功穀樂惡也

憂の奥山今日起亭

現世わ皆穀に樂亦之が爲に惡愛苦を見て月日を送わ奥山を越が如にして是善道の功を積亦わ惡道の功を積の離有

と雖死するにわ正さも賤さも巳人の差別わ無物なり
あさきゆめみしをひとせと

淺き夢見と傲も爲と
以上徳空胎惠也

人わ空より胎に生じて則愚心に産付共其惠の功を積ば現
世の苦厄わ淺き夢を見しが如にして若きも老も滅して樂
みをなすわ是を悟の一徳とわ云也亦其悟わ陽歌の文に異
事有べからず
亦曰く

七字目くの字を綴きは

とがふくとしてす
と成也

直陰歌の文に陽歌の心を結籠て歌に詠
イ たすらに口ふして散なハ なの身のニ かげんなれば
ホ のかにもへだてを無にト くをゑてチ しきを研

を悟ヌ くさ寒もル 耶してチ こないしれよッ 人もカ
しこく成てヨ にすぐれタ れにもあれよレ いと義わッ
こつにするなッ ねの道チ びり覺てナ らう身わヲ く
戻て ム つまじくウ さを忘 井 徳有ノ ぶる命わオ そら
くもタ への御神わヤ 為雲にマ しくてこそケがれなく
フ くを守りてコ と治ニ い賀の道をチ らしてぞア さ
らか成てサ びも無キ 賤樂ニ ヲ めを見メ 出度御代にミ
を置てシ すかにい 薫れニ い永にヒ とは五文をモ と、
去てセ 世を治てヌ みぬれよか去

左れば御諸君則陰陽の歌の奇特わ此の如にして亦
陰陽の歌わ治薬の鏡かな遷らぬ影わ世にはあらまじと
言が如で有まする

問辨人

其陰陽の歌の道利わ分りましたが先何れの道に於ても源と言
わ有物成が其五文わ何れを以て源根とわせらるゝや
答て歌に

梅松に功徳の四字わ信にて則御代と樂めど悟の一つあら
無ば噫、憂世かな

左れば世界わ信を以て國と爲國を築梓て樂みを見かるが故に
信を損して國を亡其國亡て苦を求是則其悟の無か故にあらす
や亦云丑寅の仲に當て渡索山と云山有て此處に惡鬼住て神茶
と鬱累の二神鬼長して此方より出入を爲故に鬼門と名付て人
皆恐亦厄を受も有而て曰く則神茶とわ惡心にして鬱累とわ積
重と成也亦丑寅の方わ萬物歸集の方土也亦鬼は歸にして辰と
成門わ出入を爲の處成か故に是樂の心有直說鬼の字を四つに
分ればノ田凡ふと成ノわ乖亦左辰也田わ土地凡わ人ふわ私也
左れを鬼門と申るわ則五文の道と損して貴さ土地の法を乖人

として私の儘に行て月日を送歸者わ其惡心積重りて崇有との
心成か故に眞の悟を開時わ其崇を受事無亦其悟も無して萬事
み心迷わす者わ譬●多の文書を誦共是文明開化にあらすして
則心迷開化と云か如きの類にあらすや

答辨人

貴君の其説わ道に當て利に異此故わ學者わ其説を知故に其悟
もあらんが無學の者わ其説を知らざるが故に其利も知事無利
を知らすして何を以て歎其悟を開かんや亦其悟無者わ皆鬼門
の崇を受やいかに

答て論す

こわ愚成事を申さるゝ者かな何ぞ其説を知らざる共其崇を受
にわらす先入わ眞の道を行を以て則悟の第一とわなす故に説
文學わ世學に順世學わ則眞學に伏左れば文學あらざる共眞の

道を學者の萬物是に願わざると云事無故に文書の悟無の身わ
世の有様を見て悟れ然に小子諸花を題にして撰教歌を詠ます
が誰か一々答辨あらん哉

一人答て曰く

然らば拙者が發句を以て答辨せん
ならば小兒の虫を安めん

一ッ人たる人の道しれと咲ける諸花を見て悟ぬれ世の人よ
此歌の心わいかに答て曰く 苦も樂も心すく志の花の貌

二ッに富士の花わとも其色益て開く程降て人に見上らる
開化して富士を敷よ學者かな

三ッわ見事に咲ぞ共艶も色香も朝貌の露の命を危けり
花なれば散ぞ其實わ残りけり

四ッわ吉野の山櫻其色艶わ世にしられ散て薫を残すなり
益長雄の名は示世迄も櫻かな

五ッわ詳よく咲て時に好まば直開け菊は秋にも君か花

明月や菊わ日本の男ぶり

六ッわ昔の神の世に戻て住める心せよ梅の花咲君か代を

梅開く心わ御代の眞な

七ッ教よ人の道菜種の花は蝶に宿貸の身ならず散て直

闇き夜を照すも實の菜種かな

八ッ山吹の花咲と實の一つたにあらざるは學して悟無如

山吹に迷わ人の亂さき

九ッ國家の色艶わ蕾なからも尋常に開化をなして美人草

離無開花をなして御代の春

十わ時と節を見て其氣悟りて咲開其諸花をかしこけれ

枯木にも淋わおかぬぞ六ッの花

發句の答辨能出來ましたが先同花を樂むにも

智惠の好なら過まりやないが虫の好こそ危けり
と云が如にして其櫻の花を見に往にも數多の遊女或はてかけ
などを召連て見物をなす其有様わ眞に天人の遊も此ならんと
思斗りの樂みをする人が終に其能身代も亡た利と云咄が有ま
するぞ是等の類わ其花の心に悟無が故にして則虫の好の樂み
也諸君能考見られよ之わ智惠が好く處の樂みでわ有ません是
虫で有まするぞ然に亦其花を見て舊は已の勉強たらす開わ人
の盛也故散を見て心を和げ其實の殘を見ては來世を樂み薫を
香て智色を研此の如の心を以て歌を詠じ或は史などに造て其
花を愛する人は則眞の樂みの風に流處の風流人にして掛樂み
をなす者わ虫が好處にあらす而も貴き智惠が好ので有まする
故に皆様昏學が無とも世學をすれを其悟も開けて智惠わ付で
わ有ません歌

問辨人

其悟の咄わ至極利有と考まするが則五文歌も説たる處の文に
悟わ我惡志こそ源信と有の悟わ小子贊成せす此故わ我惡の志
わ是正直わ馬鹿の内と言か如にして信の源に成事なし亦何を
以て其智に進やいかに答て歌に

我が身わ正直也と思ける心の内に鬼ぞすむかな

御諸君道で有まするか先世の常の怒競わ皆是我行いを吉にし
て人の行處を不足に思か故でわ有ません歎此處に一ツの咄有
ある處に頃わ皆無月の事なりしが祇園祭禮に付て其社内諸
方に幕打廻て町々の若人組皆通夜を致て其賑敷事心言葉もな
かりしが或町内に悟一と申る者有しが其朋友の人々悟一の正
直成處を悟て使わ彼者に受持せて外の者わ皆幕の内に座を組
て三味や太鼓を打鳴して歌謡やら狂やら戲遊其時に悟一わ多
の用事をすまして戻來りしが幕れ外に立止まりて其様子を伺

見て二手を組ながら思様臆々同人間に生來て掛る賑の揚處にも來ながら唯奉公人の如に立走斗りをまて其樂みをなす事も出來ざるわ常人に風の惡事を云わぬ故に何様に人から見降らる、ので有るに最此利成てわかんにんならぬ譬此賑わ摧共委細の事を長に答て言可事わ云通さんと怒を發て既に幕の内に飛入らんとせしがまて且我一人の爲に付て大事の賑を押摧てわ却て其利を失道利てわ如何わせんと思按に暮て至しが風と思付しわ臆々我乍愚成哉人を憎て心を苦むるに至らす是わ常に怠て其勉強せざりしが故に此の如に人より惱らる、や之を考見れば惱人の惡にあらす皆是怠我身の惡さ處也故に今より勉強して其智に進で人並の人間にも成ならば斯迄人に見降らる、事わ有まじと思按を極て是より怠無勉強なして智色を研亦わ十人の上に達程の身分と成て樂みの月日を送まとかや云咄が有まする左れを我惡きの志わ心を和けて智色を鑿の悟に

さて是和心鑿智を以て信の源とわ云にあらすや亦此信の心を以てこそ豊樂自由の權利わ得にあらすや亦眞を損じて自由をなすわ其權利わ無して我儘の自由成か故に信の豊樂わ見事能ばざるか如にあらす哉

問辨人

然らば亦五文歌の初に顯れたる處の五開神の御名を合して詠じたる歌に

大君わ世を天照す大國を唯冊訪に須佐の男の神

と有其歌の音意わいかに と問

答て曰く

其心わ初論の題に鳴わ瀧くと詠じたる處の歌の意味を考て知り玉ゑ

答辨人

直亦問わん然らむ其五開の文に

代々政治祖の明照わ國親人種樂風に流

どの此歌の音意わいかに

ハイ其音意を演まする能聞玉名

梅花わ大君の恵にして松葉順民治世を顯す功わ君子の躬に有

て徳教道人眞樂を施悟わ侍人の速智なり而て國家の豊を見

此故に

五文歌わ治御代の面にして心の深き程わ知らん

左れば五文の道を守れを則國家治て自由の權利を求事汗無而

して曰く大君わ民の木毎に花を咲せんと爲給故に萬民則梅の

五行を守て松の二た葉の如に五倫の陰陽和合なす亦君子わ其

功を積て世の様を計て力らを工侍人わ敵の心を悟權て國を賢

護す亦教人わ其身に信徳を保護して諸人に眞心を進其樂徳を

施也此の如に則梅松功徳悟の五文の道を信する時わ國家亡事

無國家亂事無故に國民豊樂自由の權利を得と雖之を守らざる

時わ國家亂事目に見て口で云が如而る時わ何を以て歎其自由

を爲の利を權可哉直云五文歌の道利も辨無して其自由を爲わ

是我儘の自由にして其權利有の自由にあらず然に板垣退助の

曰く今萬國の有様を見に是歐洲人種わ其他の外國を切取其勢

甚敷の根元わ則強わ弱を救て皆心連合爲が故也之に依て我亞

細亞洲も此の如に連合なすんば之を防事難故に願わくは國

に人民皆心を連合して國家を強めて安全を求其身の自由を自

在になさんば則我大旨の目的也と有は是其君子の功を積て力

らを工の意義ならずや亦國會には黨派の離有と雖其諸君子の

欲する處わ則國家を強て陰陽五行の道を求民に豊樂自由の權

利を施の處意にわ皆離無にあらずや亦民に其權利を施を以て

則代々の政治をなす處の名將とわ云直亦其自由を得時わ侍人

の智勇は百倍進で國家を毀農人は五穀満足させて豊世を開諸
工人わ萬の物品を工みて世の中の便利を計商人わ其萬物を諸
方に送て金錢を圓也此の如に五學の道盛成を以て則國を親と
わいゑり左れ共其將たる者の愚成時わ國家を親事能はざるが
故に人種樂みの風に流事も無して苦厄を求亦其名將が自由の
權利を施共民其權利も無の自由をして心に満心起時は譬豊樂
の御代に逢共其豊樂を見事能はず故御諸君に尋問す
天地の惡魔諸人を犯 此心わいかに
一人答て曰く

雷震也 此故わ

先雷の姿を鬼の形に寄わ是午わ陽成か故に頭を上りて力ら益
亦牛わ陰成か故に頭を下げて力ら益此陰の牛を形以て鬼の頭
に角を植亦猪わ陰成か故に頭自由ならず虎わ陽成か故に余畜
に勝て頭自由ならず此陽の寅を形取て寅の皮の肌帯を付たり故

に丑寅の方を鬼門と云歟則陰の牛を頭上に置て陽の虎を肌帯
よなすわ是逆にあらすや其逆を爲を以て鬼とば云也故に神わ
直陽にして鬼わ逆陰也亦鐘わ陰聲を發太鼓わ陽聲を發此陽の
太鼓を陰の鬼に持せて雲の上ああげしわ則雷と申る物わ水火
の暑寒の陰陽競て終に陰火を生じ光り發して鳴動て諸人を狂
の道利を以て其形に書也然に人わ其出世を爲を以て陽とする
其陽の身に若や逆怨の陰氣を加る時わ此陰陽競が故に其勢甚
敷して則下部を狂が如故に其雷を天の惡魔とわ名付亦地震も
此の如にして天の炎暑中に籠て地の寒水と競故に勢を以て大
地動也亦此競處の大氣地を吹破て世に發時わ大風也雷震の説
わまだ多と雖此處に畧左れを其臣たる者わ其君の意を異て已
の位光を發する時わ其國亂にあらすや亦婦わ夫に長する時わ
其家亡にあらすや故に地震を以て地の惡魔とわ云也此の如に

人わ五行の道を損じて其陰陽競時は則豊樂自由の權利を求事
無と知るべし

別人の曰く

貴君わ肝の太きか故にや其説太し拙者わ亦常に肝の細か故に
其考大違に相違して中々少き左れ共存意を發申さんが其天地
の惡魔とわ平民の靴帽子也 此故わ

譬を農夫わ昔より傳わりたる處の竹の皮笠を冠て足に芻洲を
はく時わ他に迷事無して怠らず田畑に通が故に其富貴を求と雖
是高帽子を冠亦足に靴を帶て出掛くる時わ其足の元よりケ
ツキヨユウくと云其聲に迷駭して終にお農夫様か官院さんの
様な心に成て我家業の田畑通わ忘て呑や通を怠死にお勤な
るので噫々悲かな先祖より傳わりたる處の田畑は愚家藏迄も
賣拂て其能身代を亡人も世にわ有とか申まする左れを平民に
靴と帽子を履時わ其二つわ陽にして其胎わ陰也然に此陰陽わ煩

題にして之を競争する共其陰胎わ其陽物に勝事然わす左れば
陰陽競時わ其亂止事無して終に其身を亡は則其利も無に我
儘の自由を爲か故にあらすや是御諸君五文の鏡掛て見ます
れば此の如で有まするぞ

問辨人

然らば其陰陽和合なさは如何に世わ治るや
答て云

火なら火鉢に煙草わ氣世留合て煙の立咄し

此説わ次の巻又出す

御諸君に御断申上まするは此巻わ唯五文鏡の意味を現たる
斗りで氣の浮様な面白處之無と雖此次の巻にわ少わ面白
事も出まするが第三の巻に至てわ大喜喜成説を現ます故
に皆様も見逃を願

常樂無上智進論上卷終

正 誤

四丁目ウラ	三行
一丁目ヲモテ	九行
二丁目全	十一行
八丁目ウラ	五行
十丁目全	四行
十二丁目全	一行
十三丁目全	十三行
十六丁目オモテ	九行
全	全
十六丁目ウラ	十行
三丁目	

教師ハ
神元ノハ
奉願置ハ
倫ハ
噫々憂哉
五ツワ詳よく
亦ハ
炎暑地中ニハ
故ニ其勢ハ
ソノキヨユウハ
秘傳圖書ハ

侍の誤
云の誤
直の誤
悟の誤
消除
イキニヨンの誤
末樂の誤
地の誤
其の誤
加字
消除
圖書の誤

